

タイトル：2022年度 教育セミナー（第18回）

日時：2022年9月15日（木）～18日（日）

ハイブリッド開催

今井 英理（千葉大学大学院人文公共学府）

4日間の中東☆イスラームセミナーでは、自身の研究対象とは異なる様々な時代・地域・学問領域を研究されている先生方や学生から研究内容を伺い議論することができ、自身の研究について再考するとても良い機会になった。

私は「湾岸アラブ諸国における移民家事労働者と雇用者の関係」について、政治学・社会学の視点から研究している。時代は現代、地域としては湾岸アラブ諸国、学問分野としては政治学と社会学である。大学院ではどちらかと言うと社会学の学生に囲まれて研究しており、社会学の講義を受講することも多い。

今回のセミナーの参加者は、私の研究対象とは少し離れた研究をされている方が多かったように思う。発表だけでなく質問や議論から各学問で重視される着眼点、研究方法などを感じることができ、大変興味深かった。特に歴史学は研究方法ひとつとっても知らないことが多く驚かされた。文書を自身で読み取り分析し、新たな発見を得るという研究方法（一例）、そのために語学が必要であること、それを目の前の学生が行っているのだと思うと感心する限りであった。歴史学を専攻されている学生の中には、トルコ語とアラビア語の二言語を習得している方もいた。自身は調査のためにアラビア語を習得したいと思いつつ、なかなか手を付けられないという状態で入学から半年間過ごしていたので、彼らの能力の高さは衝撃であり、言うまでもなく自分に活を入れるきっかけになった。

また人類学がご専門の鳥山先生から、移民家事労働者と雇用者どちらに興味があるのかと声をかけていただいたことが、自身の研究を捉え直す良いきっかけになった。テーマを設定した学部4年次は、研究への貢献という観点から、実証研究が少ない“雇用者の視点”に注目して両者の関係を研究することを考えていた。研究を続ける中でこのことは前提と化していたが、人類学の視点で“そもそもなぜ研究しているのか、何に興味があるのか”という疑問をぶつけていただいたことで、研究の意義を含め対象について一度立ち返り見つめ直した方がよいかもしいと考えることができた。これまで人類学にはあまり触れてこなかったが、考え方やご経験についてお話しを伺い大変勉強になった。

一方で、自分が少し離れた分野の研究をしていることの弊害もあった。まず、発表への疑問に自信を持つことができず、積極的に質問できなかったことが反省点である。とは言え他の受講生の質問力の高さは、自身の研究に近いかどうかはあまり関係ないようにも思われ、日頃からゼミや勉強会などで訓練されているのだろうと思った。このような院生や研究者が集まる催しに参加するのは初めてではあったが、この反省を生かし次回は的をついた質問ができるよう日頃から批判的志向を訓練したい。

また、自身と近い分野の研究をしている受講生があまりおらず、意見を共有することができなかったことも残念であった。今回は自身が発表できる状況になかったが、次に参加する機会があればぜひ発表し、皆さんに湾岸アラブ諸国や移民について一緒に考えていただきたいと思う。

最後になってしまったが、今回貴重な学びの機会を提供して下さった AA 研の皆様に感謝申し上げます。本セミナーでの学びを活かし、今後の研究に取り組んでいきたい。